

今から千数百年前のこと、錦木のあたりを都から来た狭名大夫さなのきみという人が治めていた。それから八代目の狭名大海さなのおほみには、政子姫まさこひめという美しい娘がいた。姫は狭布の細布を織るのがとても上手であった。

そのころ、草木の里に錦木を売るのが仕事にしている若者がいた。ある日若者は赤森の市で政子姫を見て、心の底から好きになってしまった。毎日毎日、男は姫の門の前へ錦木を立てた。そのころは女の家の前へ錦木を置き、それを家の中へ取り入れるのが嫁に行っても良いという印とされていた。

若者は雨の降る日も風の吹く日も、雪の降る日も一日も休まず錦木を立てた。しかし錦木は一回も中へは入れられず、三年もの間ただ増えるばかりだった。政子姫は機織りする手を休めてそっと男の姿を見るうちに、若者が好きになっていった。しかし二人は身分が違いすぎ、また次のようなわけもあった。

五ノ宮嶽のてっぺんに大ワシが巢を作り、古川の里の方へ飛んできては子供たちをさらって行った。ある時、若い夫婦が我が子を失って泣いていると、みすばらしい旅の僧がそれを聞いて、鳥の羽をませた布を織って着せれば、ワシは子どもをさらえなくなると教えてくれた。そういう布は、よほど機織りが上手でないと作れない。そこで政子姫は皆から頼まれ、親の悲しみを自分のように思い、三年三月のあいだ観音に願をかけ身を清めて布を織っていたのである。そのため、嫁に行くという約束はできなかった。

若者はそんなことは知らずに毎日せっせと錦木を立てていたが、あと一束で千束になるという日、体がすっかり弱っていたため門の前に降りつもった雪の中に倒れて死んでしまった。姫もその二、三日後、あとを追うように死んだ。姫の父は二人をたいそう哀れに思い、千束の錦木といっしょに一つの墓へ夫婦としてほうむった。その墓のことを錦木塚きんぎょづかといっている。